

平成29年度第2回 仙台市総合教育会議 議事録

日 時 平成29年7月26日（水）15：00～16：40

場 所 仙台市役所本庁舎2階第2委員会室

出席者 仙台市長 奥山 恵美子
仙台市教育委員会 教育長 大越 裕光
仙台市教育委員会 委員 吉田 利弘
仙台市教育委員会 委員 今野 克二
仙台市教育委員会 委員 齋藤 道子
仙台市教育委員会 委員 加藤 道代
仙台市教育委員会 委員 花輪 公雄
仙台市教育委員会 委員 中村 尚子

次 第

1. 開会
2. 協議
 - (1) いじめ・自死の防止に向けた対応状況について
3. その他
4. 閉会

1 開 会

○事務局 それでは定刻となりましたので、ただいまより平成29年度第2回仙台市総合教育会議を開催いたします。

本日、教育の振興に関する施策の大綱と、現行の仙台市教育振興基本計画を協議のための参考資料といたしまして机上に配付させていただいております。

それでは改めまして、会議を招集いたしました仙台市長よりご挨拶を申し上げます。

○奥山市長 皆様、こんにちは。

この暑さの中、またご用事の多い季節であるにもかかわらず、今年度2回目の総合教育会議にご出席をいただきまして、まことにありがとうございます。

前回の会議は、4月末に起きました3度目の中学生の自死事案という、大変大きな事案を受けてお集まりをいただきまして、忌憚のない率直なご意見を長時間にわたって頂戴したところでございました。委員の皆様方のさまざまな立場からのご意見を伺いまして、私も改めてこの間の施策、市長としていろいろ知恵を絞りながらやってきたつもりではありましたが、まだまだ現場にとって不十分なところがあったのだろう、また何よりも子どもたちに届いていなかった部分があるのだろうということについて、さらに思いを深くさせていただいたところでございました。

また、何よりも委員の先生方もやはりこのことに大変心を痛められていて、そして強い衝撃を受けつつも、さらに我々が一つに連帯した中で取り組んでいこうという強いお気持ちを持っておいでだと感じることはできましたのは、私にとって大変ありがたいことでありました。

今日は、前回の会議の中で委員の皆様、また私から話をさせていただきました幾つかの点について、この間の進捗や事務局として取り組んできたさまざまなことも含めて、報告を伺いたいと思います。この問題はご承知のとおり、去る23日に行われました仙台市長選挙で市民の負託を受け、8月22日にご就任される新市長さんのもとでも、引き続き最重要の課題として取り組まれるというお話を伺っておりますので、そのことにしっかりとつながっていくよう、今日の議論も深めてまいればと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

2 協 議

(1) いじめ・自死の防止に向けた対応状況について

○事務局 それでは、以降の進行につきましては仙台市長にお願いいたします。

○奥山市長 では、暫時の間、議長を務めさせていただきますので、進行についてよろしくお願ひしたいと存じます。

まず初めに、会議の開催に当たりまして、本日の議事録でございますが、教育委員会側の署名委員として中村委員を指名させていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

それでは、協議に入らせていただきたいと思ひます。

協議議題につきましては、今、挨拶の中でも述べさせていただきましたように、いじめ・自死の防止に向けた対応状況についてでございます。

本年4月の自死事案の発生以降、教育委員会とともにさまざまないじめ・自死防止に係る取り組みを進めてきたところでございます。本日は、本年4月の自死事案発生以降に実施してまいりました取り組みにつきまして、まだまだ途上のものもあれば、この夏休みに精力的に取り組んでいただくもの、また9月以降にさらに時間をかけて取り組まなければいけないもの、多々あるわけではありますが、まずは現時点での取り組み状況についてご報告をいただき、これらについて教育委員の皆様のお考え、また今後に向けたご提案などいただければと考えているところでございますので、どうぞよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

では、まず初めに、教育長から資料の説明をお願ひしたいと存じます。

○大越教育長 今日、資料を2枚ほどご用意しておりますが、今、市長からもお話がございましたように、本年4月の自死事案の発生以降、緊急に取り組んできた対応の状況、さらに前回の総合教育会議においてご指摘のあったような点も踏まえて、また文科省からもいろいろご指導もいただきながら進めてまいったところでございますので、今現時点における対応状況について報告をいたすわけでございますが、一方で優先度の低い事業等については今見直しも行い、実施を延期するなどして、教職員の負担を少しでも減らす取り組みもあわせて行ってきております。

この間の対応につきまして、事務局から具体的な報告をさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

○事務局 それでは、事務局から本年4月の自死事案発生以降に取り組んでまいりましたいじめ・自死の防止に向けた対応につきまして、ご報告を申し上げます。

初めに、配付資料1をご覧いただきたいと思ひます。

こちらの資料は、この間取り組んでまいりました対応について時系列にまとめたものでございます。このうち幾つかをご説明申し上げます。

まずは（２）でございます。各学校におけるいじめ事案について、解消したと思われるものや、配慮を要する児童生徒への事案など速やかに再点検を行うよう通知をし、継続的な見守りなど対応についての確認や、情報の共有を各学校において行ったところでございます。

次に、（５）学校・保護者・地域のいじめ防止に関する意見交換の実施でございます。６月５日付で各学校宛てに既存の学校関係者評価委員会を活用するなどして、学校・保護者・地域の三者によるいじめに関する意見交換の場を設けるよう依頼をしたところでございました。この取り組みに係る実施状況につきましては、後ほど配付資料の２によりご説明を申し上げたいと存じます。

続きまして、（７）全ての児童生徒との個別面談の実施でございます。こちらは４月からの児童生徒の生活の振り返りを行うとともに、いじめ・体罰の有無や、広く悩みや困り事などを話し合う個別面談を全ての児童生徒を対象に行うよう、６月７日付各学校宛てに通知したものでございます。面談の内容については、校内で情報を共有するとともに、保護者との共有が必要な内容につきまして保護者への連絡、報告を確実にを行うよう指示したところでございました。

次に裏面にまいりまして、（９）校内いじめ事案の教育委員会への定期報告の実施でございます。こちらは各学校のいじめ事案について、学校と教育委員会が今まで以上に情報を共有し、必要な連携が図られるよう、学校から教育委員会への報告を今年度から年４回定期的に行うよう実施することとしたものでございます。これにより学校と教育委員会の情報共有が図られるだけでなく、各学校におきましてもいじめの現状や児童生徒の状況の把握、校内における情報共有と組織的な対応、そして保護者との連携など、よりの確に進めていけるものと期待をしているところでございます。

次に、（１２）いじめ防止・自死予防に係る学校及び教職員からの意見・提案の聴取についてでございますが、今ご説明を申し上げてきたものも含め、さまざまないじめ・自死防止に係る対応がございますけれども、こうしたものが教育委員会事務局から一方的に発信して終わるのではなく、学校としての考え方や教職員の方々の生の声を伺うことで、より学校現場に即した施策を進められるよう行ったものでございます。

主な意見といたしましては、少しでも児童生徒と向き合う時間を確保することが、い

じめ・自死防止に向けた改善策となるのではないかというものや、教員はもとよりスクールカウンセラーや養護教諭など専門職の増員を望むもの、また部活動や学校行事などの校務の削減を教育委員会主導で行うことを望む声などがございました。その中でも今初めに申し上げました児童生徒と向き合う時間の確保について、多くの声が寄せられたところであり、教育委員会としてすべきことをしっかりと検討していく必要があると受けとめているところでございます。

資料1の最後に(14)市立全中学校に対する体罰アンケートの実施についてでございますが、先週20日木曜日に市内市立全中学校に対しまして、体罰等に関するアンケート調査の実施を依頼したところでございます。今後は小学校、特別支援学校、高等学校に対しましても実施する予定としてございます。

それでは続きまして、学校・保護者・地域の三者による意見交換の実施状況について、配付資料2に基づきご説明を申し上げます。

この三者による意見交換につきましては、6月5日付で各学校宛てに実施を依頼し、その取り組み内容の教育委員会への報告については来月を提出期限としたものでございますが、本日の資料は7月21日までに報告があったものをもとに作成をしたところでございました。

意見交換の場での主な意見といたしまして、学校に関することについては、児童生徒への個別対応の視点を常に持ってほしいこと、多様性について考える指導が必要であることなどの意見がございました。親や家庭に関することについては、親同士の交流が必要であること、家庭でもいじめはだめだと繰り返し教えることが大切であること、子どもの命を守るのは親であるという意識を持ちたい、家庭の役割について勉強したり話し合ったりする場を設けるのもよいなどの意見もございました。地域に関することでは、地域でもさらなるネットワークをつくり、地域の力でバックアップしていきたい。未然防止のためにも、自己肯定感を伸ばしてあげたい。地域、施設、民生委員、町内会など、いろいろな立場で多様な視点で子どもを捉えることが大切と考えるなど、地域の方々が積極的に子どもたちに関わっていこうという強い気持ちが伝わるものでございました。

この各学校における意見交換の実施状況につきましては、学校ごとにお便りなどを通じて保護者の皆様にお知らせをするといった対応をとっているところでございます。

それでは、本日のこの資料の最後の4の発展的な取り組みといたしまして、西山中学

校の事例を紹介させていただきます。

西山中学校では、先ほどの三者による意見交換を受けて、三者が共同で実施できるいじめ防止の取り組みを生徒とともに検討するいじめ防止ミーティングを開催したところでございます。大人だけでなく生徒が主体として参加し、四者での意見交換を行ったことが特徴的であり、終了後のアンケートからは、それぞれの立場から前向きな意見が多く出されたというご覧のような報告を受けているところでございます。

資料2につきましては以上でございますけれども、今回の三者による意見交換の実施状況報告にございますとおり、学校だけでなく保護者や地域の方々も当然ではございますが、いじめ・自死の問題について自分たちでできることがあれば何とかしたいという強い思いをお持ちであり、こうした点も踏まえながら今後さらに保護者や地域の方々と積極的に情報共有を図るなど、連携を密にしながら、いじめ・自死防止に向けた取り組みを一層進めてまいりたいと考えているところでございます。

事務局からの説明は以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。

この間、学校にとってはいろいろな通知が来たり、次々にやってほしいということが来たりして、短期的には相当に負荷のかかる状況でなかったかなと私も思いますが、さまざまな対策について今取り組みつつあるということで、心強くも思うところがございます。

それでは、教育委員の皆様からただいまの資料に基づいてでも結構ですし、この間いろいろとお考えいただいたこと、また地域や学校のさまざまな専門職の方、市民の方々から教育委員の皆様ぜひこれを聞いてほしいというようなご意見なども、個別に届いているかもしれませんので、そういったことを踏まえてでも結構でございますのでお話をいただければと思います。吉田委員、よろしければトップバッターをお願いできますでしょうか。

○吉田委員 わかりました。

今回の事案、いじめ、それから自死の防止ということにつきましては、広く多くの方に認識してもらおうということが大切ではないかと思っています。私のほうからその認識の広まりと、それから継続という視点から少しお話をさせていただきたいと思います。

本来ならば今日のような議題項目でございますと、学校での子どもたちの人間関係の

中から起きたことですので、できれば学校内で解決するというものがふさわしいこと
ですけれども、子どもたちの育ちの背景というものを考えますと、育ちとそれから社
会状況というのは複雑に交差しているところがございます、なかなか学校単独でと
いうところに行き着かないところがあると思っております。したがって、できる
だけ多くの方々、市民の皆様の方、協力を得ながら、解決に向かわなければならない
と思っております。

そのためにも、このことに関する意識というものの広がりをお願いしていかなければ
ならないと思っております。実際、先ほど説明がありました配付資料のさまざまな対応
状況の中でも、市長さんがPTA協議会の会長研修会の中でも、このことについてお
話をなされました。それから、事務局でも、学校・保護者・地域との意見交換会を設
定するよう働きかけ、それも効果的と思っております。ただ、もう一つ願いた
いことがございまして、そこで終わるのではなくて、もう一段階進まなければならない
と思っております。先ほどの説明にもありましたけれども、資料2の西山中学校の例もさ
らにステップアップした活動を行っております。ですから、具体的に申し上げますと、
例えばPTA会長が保護者だけの集まりの中でそのことを提案してもらって話し合い
をしてもらうとか、地域代表の方が地域に戻って地域住民の方々でそのことを共有し
てもらおうとか、そうしたことで、なお一層認識が広がっていき、それが一つの解決の
糸口に向かうのではないかと考えている次第です。

一方、その広がりや継続ということでございますが、こういうことに関する意識とい
うものは、時間とともに薄らいでしまうという傾向もあると思っております。今たくさんの
具体の直結する解決策をさまざまに講じているわけでございますけれども、これもや
がて時間とともに数も少なくなっていくという可能性もあると思っております。そうします
と、もう一つ別なあり方ということも考えなければならない。それは子どもたちの心
の教育に結びつくことと思っております。子どもたちが人間関係ということ考えた
ときに、道徳という教育の場があるわけでございますが、先日もその道徳の教科書の
採択の場面もありました。どの教科書もいじめに関する取り上げ方をしております。
ですから、そういう核となる道徳の時間で心の教育を行うということは、継続性に結
びつくと思っております。

もう一つ、これはいつも申し上げることですが、ふだんの授業の中でやってこそ、そ
れは確かなものになると思っております。どんなことかといいますと、よりよい人間関

係づくりです。これはあらゆる教科の授業でやれると思います。実際、授業の場面では、いろいろな意見や考え方が出てきます。ですから、相手は自分とは違った考え方を持つ。それから、表現活動でも競技活動でも、できる人、できない人、表現の内容もさまざまであるということに気づく。その気づきをよりよいものとするために、授業の中には教師というものが介在しますから、子どもたちに自分とは違う他人がいてこそ集団が成り立っているということをよりよく気づくようなコーディネートをしてもらえば、即効性とか一ター一朝ではなかなか育つものではございませんけれども、確かに本物のいわゆる心の力というものを、ふだんの授業の中で培っていくことができると思っています。

ぜひ学校現場で続けていってほしいと思いましたが、繰り返し申し上げているところです。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

吉田委員からは、まずは今回の資料1に出ていた私からお願いした学校での三者による話し合いであるとか、またPTAでの活動についても、ここに出たものだけで終わるのではなくて、これをきっかけにいかにそれぞれの関係の方々のところで、さらにこのことを継続的にテーマとして取り上げていただくか、それがあるいは教育委員会や学校に対する提言につながっていけば、より前向きなものになる。また西山中学校の事例についても、生徒も関わった形でさらに膨らみを持たせて、さまざまなこの問題への向き合いを深めていくという、そのことがいろいろな形でこの仙台市の中で浸透し、かつ広がっていくことがとても望ましいのではないかというお話でございました。

何といってもさまざまな意識改革は、倦まずたゆまず続けていかないと、子どもたちは常に新しくなりますし、保護者の方も常に変わられますので、あのときやったからいい、この年度に一生懸命やったからいいというものではないと受けとめさせていただきました。そしてまた、これは吉田委員のある意味では持論でもございます、学校の中心的な過ごし方の根幹は授業であって、その授業のさまざまな場面で子どもたちが活躍して、自分の力に自信を持つようにつなげていくこと、そしてまた多様な仲間たちがいて、その中で学びやいろいろな関係が深まっていくということ、小学校1年生から中学生までの9年間という中でしっかりとじっくりと育てていくということが何よりも学校の大きな機能であり、またそこに役割もあることを忘れることなく

いうことでもございました。本当にありがとうございました。

では、続いてお話を伺ってまいりたいと思いますが、齋藤委員、よろしいですか。

○齋藤委員 私は地域から出ている委員ということで、非常に地域のいろいろな方々から意見を頂戴しました。そこで感じたことは、一番は地域は実情をよくわからないので、知りたがっていたということです。保護者でもなく学校でもない、非常に第三者的になってしまうので、多分遠慮があったということでした。ですから、市長から提案していただいたような、この学校・保護者・地域のいじめ防止に関する意見交換会、このような会を設けていただいたことで非常に自分たちが手伝えるすべが見えてきたということをおっしゃっていました。ただ、これは話し合いで終わるのではなく、今も吉田委員がおっしゃったように、それを礎にそれぞれの学校や地域に合ったネットワークをつくっていくことが、これからの目標だということを強く私も感じました。

それともう一つ、感想として、いつもいじめと自死が並んで語られてしまうようですが、一体のものではないのではないかという意見がありました。確かにいじめが自死につながる案件もありますが、それ以外の要因による自死もあることを考えていかななくてはならないと思います。自死に至ってしまった原因分析を専門的な力をかりながら、その当該生徒を取り巻く環境や要素を客観的に真摯に捉えることが重要であるということも同時に感じました。

それと、先ほどもあったように、資料1の(6)で命を大切にする教育、まさにこの部分に全てが凝縮されると思いますが、命はその人だけのものではなくて、命があること自体、人のために役立っているという自己有用性を、子どもたちにその時々でわかってもらいたいと思います。資料2のほうでも、家庭のほうからの意見として、子育ての幹は家庭教育であるとか、家庭での親子の触れ合いが大切だ、それから地域からは、地域でどんどん中学生に活躍してもらいたいというような意見が出されたように、やはり親子で今まで生きてきた成長を振り返ってみるとか、それから地域と関わることで地域には年老いた人もいるし、病気の方もいる。そういう方と触れ合うことで生きているということの大切さを肌でわかったり、また、人に褒められたり、人に喜ばれるということが自己肯定感につながって、自分や他人をも大切にできることにつながるということは、非常に大事な部分だと思います。

あと教育現場の立場から考えますと、教育現場は常にいじめを生まない学級づくりや人づくりを目標に掲げているので、私たち教育委員会は、その教育現場の環境を整え

ることがまず必要であるということを感じました。そのためにも資料1の(12)にいじめ防止・自死予防に係る学校及び教職員からの意見・提案の聴取とありますが、こちらは実に現場の声であって、大変重要であり反映していかなくてはならないと思います。

今回自死に至ってしまった3名の生徒さんのご冥福を心からお祈りするとともに、私たち全ての子どもの命を守る大人として、私はその当該校における子どもたちを二次的な影響から守らなくてはならないということをここに強調したいと思います。この二次的な影響というのは、例えばですが、マスメディアやSNSでの拡散でうわさがひとり歩きしてしまったり、あとは決してあってはならない誹謗中傷などで学校や子どもたちが傷ついているという現実も、地域の人からも聞こえてくるところがあります。そういうことを考えますと、私たち全ての大人たちがもう一度心して子どもたちに向き合う必要があるということを感じました。

地域としてももちろん子どもたち一人一人と関わるということと同時に、資料2の3、家庭や学校からの要望として、いろいろな子どもや家庭の困っていることを個人や家庭にとどめないで、学校や地域の問題として取り組んでほしいとか、それからいろいろな立場で多様な視点で子どもを捉えることが大切というあたりから、世の中にはいろいろな考えを持った人がいることや、さまざまな人間がいるなど、どんな社会でも壁にぶち当たって失敗をして乗り越えてきた人が周りにはたくさんいるということ、そしてその人たちはいつでも相談に乗ってくれる、そういう地域の大人もいるということ、子どもたちにはぜひ信じてもらいたいと思います。そのためにも学校、家庭以外にも地域に居場所づくりのようなものを、私、地域の者としてはこれから力を注いでいくべきと思いました。

この居場所は単に子どもだけのものではなく、親もそして大人も、それから高齢者も集える場所であって、皆でつくっていくこと自体が、子どもへのメッセージとなるはずだと信じています。奥山市長がずっと提唱されておりました、市民総ぐるみのまちづくり、市民協働のまちづくり、こちらの言葉を胸に、これから先地域も学校も家庭も一体となって守っていきたいと思っております。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

齋藤委員からは、地域のさまざまな方から、その地域ではいろいろ報道等で事案があっても、実際どうだったのかということが見えてこないとか、地元の学校のことも意

外と聞こえてこないということで、地域の方としてももどかしい思いをしつつ、ただ地元の子どものために何かをしてあげたいという、そういう気持ちは非常に皆さん強く持っていらっしゃるということでございます。

やはり私たちは、簡単に学校を支える地域、家庭と言いますが、では具体的に地域でしていただきたいことは何なのか。地域でそれが可能になるために、どういう条件整備が必要なのか。先ほどの吉田委員のお話でも感じましたが、議論をさらに具体のものにするためにどう深めていくかということが、今まで少しその手前でとどまっていたのかなと私自身も反省するところでもあります。例えば地域という要素が大事だとすると、仙台市が進めるいわゆる区役所からいろいろな地域団体も始めている地域づくりというものと教育の課題との接点をどうつくっていくか。どういうことを具体的には施策として考えていってバックアップすると、よりそのことの実現に近づけるのか。いろいろご意見を伺いながら、具体の知恵を絞らなければいけないのかなとも思いながら、齋藤委員と吉田委員の話を伺わせていただきました。

今野委員からお話をいただいてよろしいでしょうか。

○今野委員 いじめ・自死の防止に向けた対応状況の報告書を拝見いたしまして、今までいろいろな対策を迅速に出されてきましたが、今回も14の内容にわたりまして、実施またはこれから実施する内容を含めまして、多くのことが打ち出されているなど感じております。今回は特に、前例にとらわれず新しいものがあり、どちらかというところ今まではトップダウン的な割合が高かったですが、今回は広く意見を集めるとか、ボトムアップ的な考え方が多く盛り込まれているということで、現実に即したい案が出てくればいいなと感じております。

例えば、(12)ですが、この中に思い切って校務の削減をするとあるわけですが、ぜひこれもやっていただきたいと思います。先生方はやはり児童たちと向き合う時間を確保するということが一義的に一番大切なことのはずですが、報告書が次々と増えていく中で、それにとられる時間がかなり増えてきているという話も聞いておりますので、実態がどの程度なのか把握できておりませんが、例えば教育委員会などへの報告書につきましても、思い切って削減する。そのための実態調査が必要かと思います。報告書だけに限らず様々な書類等の作成について、平均的にどれだけの時間がかかっているのか。また、その重要度はどうなのか。昔から10年も20年も同じ報告書があって、もしかしたら時代に即してないものもあるかもしれませんので、もう一度そ

の重要度について見直しをできないかどうか。それから、簡素化できないか。あるいは他の書類で代用できないか。実際に削減する時間の目標を設定して、議会のご理解などもいただきながら進めていく必要があるのではないかと感じております。

それから、(8) 児童会生徒会主体のいじめ防止活動の取り組みということですが、これに関連して、ほかの自治体では現実に進めているものがあるようですが、例えばクラスの中にいじめ対策のための生徒を組織化する。例えば学級委員と同じように、何々委員みたいなものをつくって、それを1名だけではなくて複数名で、クラス全体のSNSであれば、その情報をほとんど把握できるような組織化をして、いじめを直接やめさせるというよりも、情報を集めて先生方に早く知らせる。担任の先生やいじめ対策の専任の先生などが、生徒の情報を集める組織化ということも、もしかすると有効な方法なのかなと感じております。生徒同士ではかなり情報でつながっているようでございますので、その中から情報を集めることをもう既にやっている自治体があると聞いておりますので、内容を調べて検討してみるのもよろしいのではないかと感じております。以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。

(12) のさまざまなご意見が出された中で、やはり大きく占める問題として、児童生徒と向き合う時間の確保、これはこの会議の場においても前回もお話をいただいたことでもありますし、この間、議会でもこの点を中心にお話がされたということもございます。総論としてこのことの重要性を疑うところはないんですが、具体的に何からやるかとなると、教育委員会事務局も正直言って難しかったというのも本当のところかもしれません。そういう意味では、改めて校務の削減についてどこまで本当に可能か。また現場としてはどう考えていらっしゃるのか。またそのさまざまな調査の中には、市長部局や市長から、これをお願いしたいということで行っているものもあるかとも思います。市長部局や教育委員会事務局も、本当にこの調査報告等がどういう形で簡素化、削減できるかということも、大いに考えていかなければいけないと思います。ありがとうございます。

花輪委員よろしいでしょうか。

○花輪委員 4月の末に非常に痛ましい残念な事案が起りましたが、この事案発生以降、多くの対策、今日14項目ということで示していただきましたけれども、それらが一つ一つ当初の意向をきちんと実現して効果が上がるといったことに、私は期待したい

と思います。

私なりにこの14の項目について、どういう目的でこうした対策がとられているのか考えてみました。事案以降とられたさまざまな対策、今回14示されましたけれども、この事案の本質をつかんで、いじめのない環境をつくるためのさまざまな施策ということは間違いありません。それを幾つか分けてみますと、まず1番目に、文書あるいは通知による緊急の教員、生徒さん、保護者等の意識の向上あるいは啓発に関するものが幾つかあります。例えば1つ目、緊急メッセージ。3つ目、緊急通達。9つ目あるいは10番目。こういうものが意識の向上あるいは啓発に関するものと位置づけられます。

それから、もう一度校内の現状をよく再確認してくださいというお願いも幾つかあります。例えば2番目、それから7番目、8番目等々。さらには校長先生等に対する研修あるいは講話をすること。4番目、11番目、13番目は、こういうカテゴリーに入ろうかと思っています。

さらには意見交換の場を設定するというので、5番目、これはこれまでも挙げられてきました、学校・保護者・地域のいじめ防止に関する意見交換の実施ということ。もう一つが、いじめあるいは体罰等に関する調査、そして意見聴取ということで7番目、12番目、14番目等があろうかと思っています。

最後に5番目として、いじめ防止教育に関するもの、6番目があろうかと思っています。

このような形で割り切れるものではないですが、このように整理してきますと、現在までのいろいろな施策というのは、発生した事案の本質は何だったのか。それを見きわめるための検証活動と言っていると思いますが、そういうものや、起こった事案に対する再発防止のための施策、仕組みづくりなどが多いように思います。これは事案が起こった後ということで当然早く早急に行うべきものということですが、例えば6番目、命を大切に教育については、長い時間はとてかかりますが大事なのではないかと思います。これからはそういう再発防止、予防策、そういうことに向けた多面的で重層的な対応策が必要だろうと思っています。

それから、既にいろいろな委員の方に指摘されていますが、学校・保護者・地域の方々の中での意見交換、あるいは現場の最先端で教育を担っている各先生方からの意見聴取、ここから出てくる切実な要求、要請ということもあろうかと思いますが、考え方というのは非常に大事であって、単に意見を聞いたということではなくて、出さ

れた意見の中から有用と思われることをさらに対応策として具体的に実施していくことが必要なのではないかと思います。

2つ目ですけれども、私は常々縦のつながりという言葉を使いたいのですが、今の小中の生徒さんたち、高校も含めて、あるいは大学も含めてなのかもしれませんが、縦につながる機会が少なく感じております。昔に比べてないということで、これは弱点なのではないかと思っております。ここで縦というのは、同じ学年の生徒たちだけで活動するというのではなくて、学年を飛び越えていろいろな活動をするというのが大切なのではないかという気がします。といいますのも、ご存じのように日本は核家族と言われているように、子どもと親で一つの世帯をつくるということがありまして、関係性が非常にシンプルなままにきているのではないかと思います。昔の家族構成ですと、おじいちゃん、おばあちゃんがいて、お父さん、お母さんがいて、子どもがいて、その子どももきょうだいがいてという家庭の中で、自分と親との関係以外にも、自分とおじいちゃん、おばあちゃんの関係や、お兄ちゃんとお父さんの関係、あるいはお兄ちゃんとおじいちゃんとおばあちゃんの関係というように、いろいろな関係性をその人たちが経験してきている、見てきているということで、家族というのはいろいろな関係がある。家族の中ですら、いろいろな関係がある。さらには外に出ますと、自分より小さな子どもから、非常に上のお兄ちゃんお姉ちゃんまでまとまって活動するような機会というのは、非常に多々あったと思います。そういう中でいろいろな人がいるんだと、弱者という言葉で言ってもいいと思いますが、中には幼いから弱者という弱者もあるし、本当に例えば障害を持った方もその中にもいるということで、世の中には多様な人たちがいて構成されていて、そういう人たちも一緒に活動して何かをつくり上げるんだと、そういう経験というのが非常に重要であろうと思います。いじめというのは、どうもそういうところに思い至らないというのが関係しているということで、私はそういう縦につながるような活動の場を提供する。これは恐らく学校という場を超えていると思います。そういう意味では、地域の方々の協力、地域の活動というのが大事なのではないかと思いますが、そうしたところまで踏み込んでいくような施策がゆくゆくはとれたらいいなと思います。

私の2つ目は、生徒たちが縦につながるができる活動を今後つくっていくべきではないのかなと思います。

3つ目は、これは言うまでもないですし、皆さんそう認識していると思いますが、や

はり迅速さというのが今あらゆる場面で求められているような気がします。時間的余裕は、私たちには余りないのかなと感じています。もちろん拙速になってはいけません。迅速さが今一つの大事な要素として求められていると感じています。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

改めて現場の声を大切にして、聞くだけではなくて施策に必ず生かしていくということがないと、現場の信頼を得ることができないという点や、また子どもたちの社会における異年齢の縦のつながり、このことの持つ子どもの人格形成上への影響といえますか、そういうものがなかなか自然にはできにくくなった中で、社会や地域が関与してどうそれを補う活動を構築していけるかという点についてもお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは、加藤委員、いかがでしょうか。

○加藤委員 大分これまでに出了ことと重なる部分が多いので繰り返しになることも多々あると思いますが、まず、この間、十分できる限りのことをやっていただいたなという感があります。ただ、市長も冒頭におっしゃったように、また教育委員会の中でも、私が覚えているには吉田委員が事案発生直後におっしゃったように、さまざまなよいと思うことをやりますが、それが本当に子どもところに届いていたのか、届いていなかったのではないかという部分がまだまだ残っていると思います。子どもところに届いたかどうかというのは、今後、本当に意味のある、そして無理のない取り組みを継続していく上で非常に大事です。言いかえればいろいろな対策は、実施したということでは終わらない、それだけでは成果が判断できないということだと思います。そのため、この間にいろいろなことはやった、でも、それが子どもたちのレベルに、学校のレベルに、保護者のレベルにどう届いているのかという生の素朴な感触を含めて、現場にとって役立っているのかどうかを検討することが、今後は、何より重要なと思っています。

そのことは、恐らくたくさん報告書を上げていただくということではなく、「あれはよかったね」とか、「あの後子どもたちこうだよ」という、非常に素朴なレベルでのコミュニケーションの中からわかることではないかと思います。それは、教育委員会と学校、地域と学校、保護者と学校の中で交わされる会話の中で、全体の傾向として何%どうだったかということではない、何となく「あれよかったよ」というフィードバックをお互いにし合えることです。それによって、意味のある対策であれば残し

ていく、それほどでなかったものであれば思い切って削除していくという施策づくりにつながっていくのかと思います。

その意味で、今回、全ての教職員にご協力いただいて実際的な声を伺うことができたことは大変ありがたいことだったと思います。これを聴取だけで終わらせないということが非常に重要なことだと思います。

特に、これも繰り返しになりますが、児童生徒と向き合う時間の確保、それから校務の思い切った削減というのが切実に届きました。新しい取り組みを増やすということはある意味容易ですが、それまであったものを減らすということは大変勇気の要ることで、大変難しいことだと思います。しかし、減るものがないのに増え続けることは無理があります。そのほかのご意見も、やはり加配教員とかスクールカウンセラー、養護教諭、事務員の増員を求める声、つまりほかの専門職に任せるという方法での削減というご意見と考えることができます。つまり教師がもう一人一人では抱え切れない多領域のニーズが教育現場にあふれ返っているのではないかと思います。

教育だけではない、例えば医療や保健福祉や事務の世界との連携によっても、もう少しサポートできる方法があるのだろうかと思います。慣習的に継続されてきた業務、時代の要請に合わせて、学校のことだから教師にお願いするというで増えてきた業務が積み重なって、何を優先するのか、どう重みづけするのかということの整理が難しくなっているところだと思えば、やはり思い切りが必要だというその声に戻るのだろうと思います。

教育局のほうでも既にいろいろお考えになってくださっていますし、また、教職員からは教育委員会に主導で行ってほしいという要望も上がっているようですが、何が実際的に削減できるのかというのは現場にしかわからないこともあると思います。そういう意味で、今回教職員にいろいろお声をいただいたように、現場教師にもう少しご協力いただきながら、具体的に提案をいただき、さらに意見を交わしながら、より実態に沿った現場支援というものを教育委員会が目指していければよいと思っております。

○奥山市長 ありがとうございます。

前回は加藤委員、吉田委員からいただきましたが、さまざまによかれと思ってやることはやるんだけど、それが本当に即、よいことにつながっているのか。それとも、よかれと思ったが実際的にはかなり繁忙さを生んだり、悪くはないが即効薬とまでは

いかなかったりという評価や、いろいろな受けとめが現場の中ではあるだろうと思います。それを率直に受けとめてどう評価をしていくのか。ここも大変難しい話ではありますが、ご承知のとおり、これまでやってきたことの評価、もちろん市長部局は市長部局、また教育委員会事務局は教育委員会事務局なりに考えることはもちろんですが、あわせて全体について第三者の目で見ていただくという委員会も今回市長のもとに立ち上げるということで、今、最終的な人選の調整とかをさせていただいています。場合によってはそちらでこのことをさらに踏み込んでヒアリング等をしていただいて、そこで例えば報告書の削減ならどういうことが可能か、現場の声を聞いた上で目標を出していただくとか、そういったさらに具体の踏み込みが今後必要になってくるかもしれないですね。ありがとうございました。

中村委員、お願いします。

○中村委員 大分皆さんと同じようなことで重なってしまうのではありますけれども、私は保護者という立場でここにいるわけですが、実際に私は、今回、学校関係者評価委員会に出席してまいりました。そこで感じたことですが、やはりこの（５）のところが、とても私も今注目しているところであります。まず地域の方、それから町内会長さん、そして全PTA会長、児童館の館長さん、そして現役保護者など、さまざまな立場の方が委員として出席していただいております。そしてそれぞれの立場からのお考えをお聞きして、いじめを本当に皆さんが真剣に考えてくださっていることがよくわかりました。当然、年齢も皆さん違いますので、これまでの経験に基づいた深い考えだったり、それから専門的見地からのご意見をいただいて、自分が今まで思い及ばなかったことなど、大いに気づきがありました。そして、どの方も子どもたちの安心と安全を第一に考えてくださっている、それを望んでいる、学校、保護者、地域がみんな同じ方向を向いているんだということが確認できました。そして、終了時間になっても、皆さんまだまだ思いを伝えたいということで、本当に終わり時間が随分延びてしまいました。そのくらい皆さんは本当に真剣に取り組んでいただいております。そして、そこにやはり子どもたちの意見も入るといいねということも出ておりました。大人からの一方的な投げかけだけではなく、子どもたちも、どうしてそういう投げかけになったのかということの説明すれば、そこから自分たちに落とし込んで、そして考えることにつながるということでした。

やはり、そういった意味で、この資料のほうにありました西山中学校の取り組みはと

でも興味深いものです。資料にありますアンケートを見ますと、大人も子どもも本当に充実したミーティングになったのではないかと思います。私たちはこうした取り組みを今ここでこうやって目に見ることができますが、こういったことは多くの人の目に見える形で伝えられていくといいなと、そういうことを望んでおります。そして、各学校なりに持ち帰っていただいて、実際にやってみるところまで落とし込んでいただければ本当にありがたいと思います。

いじめについてこの三者での意見交換は今回初めてということで、何度も皆さんもおっしゃっておいりましたけれども、やはりこうした一歩踏み込んだ実動的な対策が必要なのだと思います。実際に私も参加してみて、そして、こうして西山中学校などの資料を見てみても、地域も保護者もたくさんの意見を持っていることがわかります。学校だけでなく、こういった方々とオープンに考えていくことが必要なのかなと思いました。

そのほかの部分では、児童生徒会主体のいじめ防止活動ということですが、取り組みの事例を共有とありますが、もし既に事例が上がっているのであれば、まとめてきちんとした形でなくても、スピード感を持って随時発信するなどの対応が必要かと思えます。そして、10番の配慮を要する児童生徒への指導・支援に関する対応の通知などについては、やはり年齢が上がるほどほかの子と差を感じるもので、自尊感情がやはり下がっていくこともあるのではないかと思います。そこで、その子の生きづらさが保護者と学校が共有できるような時間をとる、教育委員会から通知を出し、学校にお任せするという形ではなく、そこは連絡をとり合って、学校から依頼がなくても例えばスクールカウンセラーを同席させるなどの対応をして、どう指導して、どう支援をするか、具体案がその場が出るようにするほうが前に進めるのではないかと思います。

そして、皆様も先ほどからおっしゃっていますが、この12番のいじめ防止の教職員の方々からのご意見ですが、やはり子どもたちに一番近い現場の教職員の方々の意見は本当に貴重なものです。今こういった状況になったからには、少ない人数で考えるよりも多くの人に広く意見をいただいたほうが拾えるものも増えると思いき、対策もよりよいものになると思います。その観点からはとてもよいことだと思います。意見として出されているものは、これまでいろいろな場面で申し上げてきたことと同じなので支持ができます。しかし、先ほどからあるように、例えばこの中の一つであります

児童生徒と向き合う時間の確保などは今までも言われてきたことでもあって、そしてこのままだと何も変わらない。児童生徒と向き合う時間を確保しなければならないのであれば、どうすればそれを実現できるのかということをもう一步踏み込んで考えなくてはならないと思います。

先ほど吉田委員から、例えばPTA会長が保護者と話し合うということが出ましたが、私はPTA会長でもありますので、全員ではないですが、ある程度話をする事ができました。そうしたところ、例えば先生の時間を確保するにはどうしたらいいかという話をする、実際に案が出るんです。そこで、そうしたものを吸い上げて見えてくるものもあるかと思えます。そうしたことを今後は教育委員会から具体的に提案することも必要ではないかと思えます。

今回、三者での意見交換もとても素早い対応をすることができました。6月5日に通知をいただいて、私の学校は6月7日が委員会でしたが、きちんとそのことを本当にみんな真摯に受けとめて話し合いをすることができました。そして、実際にここに参加し、同じ方向を向いているということを肌で感じ、そして共通認識を持つことができました。今後はやはりこの対策をなすために、実動の部分での対応をしていかななくてはならないということを私も今深く感じた次第です。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

今日のキーワードの一つとして、恐らくは、今までどちらかというところある程度抽象度の高いレベルで、例えば児童と向き合う時間の確保ということは言われてきたが、では、その中でたとえ非常に小さいことであってもできることは何か。また、具体的に言えばある程度の予算の枠組みと覚悟を持って取り組む中で、さまざまなレベル間の施策を、市長は大きな財政の枠組みを考える視点から、また、現場からはさまざまな現場としての声や工夫、この両側から具体を語り合っていかななくてはいけないというのが、今日、各委員の皆様のお話の中で共通していたことかなと。

また、改めて、中村委員からも、現場の声というもののの中にヒントが隠れているのではないかということで、なかなかそれを今まで拾う場や機会や、特に私などもそうですけれども比較的遠い部分にありますと、どうしてもその意見が上がってくる中でまとめられて、どこかで聞いたような意見になってしまうということ。先ほど加藤委員のお話を聞いていて、ああ、なるほど、とてもわかりやすいお話をいただいたと思えましたのは、生の素朴な感触としてこの施策をやってくれと言われたこと、または現

場でやっていることが素朴な感触として、いいと思えたのか、それとも、あまり使用前、使用后、変わらないなというものだったのかとか、そういったことをどうしても行政は数字に頼りがちなところがありますが、実感を大切にした評価というのにも必要ではないかというお話も各委員のご意見の中に共通していた部分があるかなと思います。

ただいま委員の皆様から、それぞれにこの間の報告を受けて、またこの間のご経験を踏まえてお話をいただきましたが、一つ一つについて教育委員会としてどう思うかということをお答えすると時間がかかりますので、教育長のほうから、幾つかの点に絞って教育委員会としての考えを聞かせていただければと思います。

○大越教育長 ありがとうございます。

今、6人の委員の皆さんから、それぞれお話をいただきました。今回、いろいろと緊急対策をさせていただきましたが、結果的には多様な意見を求めることができ、その中で、やはり私たちは今後宿題としてそれを具体的な施策につなげていく、それを論理構成していく、システム化していくということが求められるわけでございます。その中で私なりに感じた共通項は、以前からキーワードとしてありました情報の共有です。これは大人のほうに求められるものでございますが、管理職、教職員、保護者、地域の大人がどう情報共有を持つかということ、これは意識を今まで以上に変えていく必要があると思いました。

市長からもお話がありましたように、子どもに届いていたかどうかという点で、子どもたちの意識が自分たちの時代とは全然変わってきています。自己肯定感をしっかり持つ、自己嫌悪しないようにする、そうした以前は当たり前になっていたことがなかなかできない状況もあるということをもみんなで情報共有して、そこから取り組みが出てくるという点と、子ども自身にそうした意識を道徳等を活用して、自死予防教育というのもさらに充実させていかなければならないという点では、最後には予防につなげていけるようにするにはどうすべきかを考えていく必要があるかなと思います。量的な予算を伴う施策は今後も可能な限りやっていく必要はあるかなと思いますが、恐らくそれでは十分ではないであろうと感じています。そうすると、今後、いろいろお話のあった質的な改善をどうしていくかというところで、最後はやはり、すき間の子どもたちや保護者をそういう状態に置かないようにする、なくしていくというところに我々ももっともっと、次元を上げて取り組んでいかなければならないと感じました。

そういう点では、多くの意見を聞くということからいろいろなヒントをいただけることが今回再確認できたということはよかったと思います。ただ、まだ取りまとめ中ですので、今後しっかりと意見を集約した形で、具体的にいい施策を形にしていくということに今後努力していきたいと思います。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

先ほどからの委員のお話として、長期的に取り組む課題として、やはり命を大切にす
る教育であるとか、そういったもの。教育長の言葉でいうと予防的になるような取
組みが大事であって、いわゆる、緊急対策のようなものから長期的なものまで、視野
を足元から少し未来に向けて幅広にやる部分まで、何段階か考えていかないと、今こ
の問題が起こったから、さあと言って、慌てて何か対策ばかりやってみると、現場の
負担感だけで徒労に終わってしまうことも多いのではないかとということもあろうかと
思います。

今日は大体1時間半ぐらいを私としては想定していましたが、今、一巡してお話を伺
ったところで、あと20分ほどは議論を深めていただけるかなと思います。

先ほどお話をいただく中で、例えば今もお話がありました予防的な側面から命を大切
にする教育のあり方でありますとか、教育現場の環境を整備していくという一歩踏み
込んだ施策に、現場からの声をどう反映していくかということや、また、地域で子ど
もの居場所をつくっていくとよく言いますが、そのことについて具体的にはどうい
うことができるのだろうか、今、地域における社会資源といっても本当にいろいろな
ものがありますが、それらは本当に生かされているのだろうかとかですね。

また、最後に教育長からも話がありました、やはり親御さん、また児童生徒といっ
ても、本当に多様であります。どうしても委員会の中では、一律に児童生徒もしくは
保護者ということになりますが、実際の各学校、また地域においても、さまざまな家
庭的な経済面での困難、また家庭での親御さんの就業時間によっての子どもと接する
時間の多い少ない、また子どもさんも兄弟が多い少ない、さまざまな環境によって困
難の度合いが違ってくる。そうしたいろいろな面で、ある意味では経済的にいえば格
差と言ってもいいのかもしれませんが、そういう違いが保護者なり家庭の環境なり学
校の児童生徒のありようがあったりする中で、どうやって狭間に落ちそうな子どもな
りご家庭なりにアプローチをし、届くようにしていくのか。それらについて皆様方か
ら、お気づきの点などをお話しいただければと思います。

例えば地域の居場所づくりというと、今までですと児童館ですとか、それから市民センターですとか、いろいろありますが、余り中学生の生徒が行きそうでもないような気がしますね。昔、生涯学習課長をやっていた者がこういうことを言っているのかとは思いますが。地域の居場所として、今後、地域にあったらいい形、例えばこども食堂のような形で、今までの社会教育事業とはちょっと違ったところから切り込んだ、NPOですとかいろいろな地域の方々による活動とかも始まっていますが、どんなスタイルの工夫とか新しさが必要だとお感じでしょうか。齋藤委員にお伺いしてよろしいでしょうか。

○齋藤委員 私は、まず子どもたちからは高齢者が元気をもらえる、それから高齢者が何かしら子どもたちに伝えていく、先ほど花輪委員がおっしゃったように、各世代の部分、それから異年齢の子どもたち、異年齢の大人たちとつき合うということが一番の地域の根っこだと思っています。もちろんNPO活動が非常に盛んになることも大事だとは思いますが、実は地域の中でやろうとすればできることはたくさんあるような気がします。

学校、保護者、地域とのこういう意見交換会と同じように、だんだんそれぞれの立場が歩み寄って話し合いをしている地域はたくさんあります。例えば、中学生が隣にある児童館に放課後に来て、小学生、児童クラブの子どもたちと遊んで帰るといふ生徒たちが結構いるということを目にしたり、それから、小学校の放課後子ども教室で地域の高齢者の方たちが子どもと一緒に将棋を指したり囲碁をやったり工作をしたりで楽しく過ごしていく。そのときにはもちろん異年齢の子どもたちが異年齢の大人たちとつき合うということなど、居場所づくりはいろいろな形でできるような気がします。

その一つとして私は、地域のリビングルームのような大人と子どもが自然に交流できる場が欲しいなと思っています。もっと平たく言えば、子どもたちが帰ってきてなぜ靴を揃えなくてはいけないとか、鉛筆はこうやって持つほうが書きやすいんだという知恵を、年を重ねた人から自然に学ぶことができる場、それと同時に子どもからは新鮮な情報を高齢者が教えてもらう場、そんなアットホームな居場所を作りたいと思っています。

実は、自分の町内の町内会長さんに、ぜひ地域のリビングルームを集会所でやってみませんかと提案しますが、言っている意味がわからないとなかなか理解していただけ

ませんでした。それがあつた日、町内会での女の方たちがカラオケサークルをやつていた集会所に小学生が3人ぐらゐ放課後に立ち寄つていつたそうです。小学生は年代の上の方のカラオケがよくわからないからカラオケはしないけれども、結局そこでお話をしたり宿題をしたりして帰つていつたといひます。私は、実はそれが一番望んでいつた地域のリビングルームなのですと町内会長さんに言ひましたら、そういうことでのいいんですねと気がつてくれました。地域での居場所づくりは様々な形でできる可能性があつたことを強く感じます。

また、西山中学校の最後の言葉にもあつるように、地域自体も一緒になつて頑張りましようとか、生徒たちも、話を聞いてくれる地域の方々がいるんだといふことを感じてくれているといふ感想は非常にありがたく、地域にぜひ知らせたいと思ひました。

あとは、例えば夏祭りなど高齢化が加速して、パイプ椅子も運べない、机も運べない、テントも立てられないよつな状態になつていつた地域があつたかと思ひます。そのあたりを中学生や高校生に企画段階から任せるとよつなよつな新たな発想転換をしていくべき時期であるといふ気がしてあつます。いろいろと細かい点になつてしまひましたが、みんなでの知恵を出しあへば、よつなよつな展開ができるよつな気があつます。以上です。

○奥山市長 ありがたうございつます。

今までの地域のことといふと、どうしても町内会活動支援であるとか団体ごとの仙台市の助成金制度であるとか、なかなか横串を通すよつな事業に対して行政がお金を出すといふのもあつなかつたり、行政の施設は児童館とか市民センターとか、社会教育もいろいろな事業ごとに目的化されていつた部分があつますので、そうじゃないと予算がつきにくいといふこともあつますが、そういう意味では、地域において子どもに活躍する場をつくつて、いろいろな形で子どもが自分たちが大切にされていつた、もしくは自分も地域の役に立っているといふことを、そのときは実感しなくとも、後から振り返るとそういうことだつたなとわかるよつな緩やかな人間関係みたいなのがあつたことが望まれるのかもしれません。ありがたうございつます。

ほかに何かお話ございつませんか。花輪委員はいかがでございつますか。大学とは随分違つた話になつていつたかとは思ひますが。

○花輪委員 また縦のつながりといふ点をもう一度言わせていつたかと思ひますが、今まさに齋藤委員がおっしゃつたことを頭の中で想定しながらお話したのですが、

今の生徒さんたちの関係性というのはシンプルだと思います。自分と親、自分と教師、自分と同じ学年の仲間という、非常にシンプルな関係性の中で行動している。しかし、社会は実はそうではなくて、いろんな関係性があった中で、自分がそこにて生きている、生かされていると、そういう実感がなかなか立てにくいのだらうと思います。それで同じ学年の中に弱者がいたときに、その子を受け入れたり一緒に何か行動をするということで、その子を助けたりといったことがなかなか考えにくい、そういう考えが身につくような場というのは少ないと思います。

そうした意味で、地域の中で、齋藤委員がお話しされたように、本当におじいちゃん、おばあちゃん、あるいは隣の人、知らない人でも同じ町内の人、そういう人たちのつながりの中から、自分といったものがそういう中で生きていると実感するような経験というのがすごく大事で、そういうものを我々がうまくつくることのできるのであれば、相当、いじめ問題も違った様相になっていくのではないかと私には思えます。

特に今の少子高齢化の中で核家族、それから兄弟が誰もいないという状況がかなり多くなっている中で、やはりそこを壊すには地域の存在、地域の何らかの活動というのがキーになるのではないかと思います。地域からというのが今後は非常に有効なものだと思います。

○奥山市長 今回のお子様方のシンプルな人間関係というのは、逆に言うと逃げ場がないということかもしれませんね。親にノーと言われる、例えば学校の先生にノーと言われてなくても学校自体の成績が急速に落ちるとか、試験に落ちるとか、また、それによって親御さんからもかなり厳しくいろいろなことが子どもに求められるとか。そうしたときに、昔ですとおじいちゃん、おばあちゃんというような存在がいて、全部のおじいちゃん、おばあちゃんがそうだったかどうかわかりませんが、成績はほどほどでもいいんだ、元気でいてくれればいいんだと言って、親の価値観と違う価値観が子どもを慰めたり励ましたりしたかもしれません。今はなかなかそういうものが、家庭と学校の中だけを往復していると持ちにくい環境になっているということの中で、地域があるいは疑似おじさん、おばさん、疑似おじいちゃん、おばあちゃんのような形で、もう一つ視点がずれたところからその子のよさを盛り上げていけるような関係ができないかと。それがどうやってお仕着せではなく自然な形でつくっていけるかということが、子どもの心に届くかどうかというあたりのポイントなのかもしれません。ありがとうございます。

中村委員、何か補足としていかがでしょうか。

○中村委員 私は、やはり先生方の意見のところ、先生方に余裕が生まれるように何か手を打ってもらいたいと思います。子どもたちの中でも、先生に話したいけれども、先生がつかまらないということもあろうかと思えます。やはり先生方もずっと、例えば月曜日から金曜日まで学校に行き、そして土曜日、日曜日、部活があり大会がありということになりますと、先生のほうも仕事も山盛りになってしまい、そうした中で、もし生徒が何か先生に言いたくても時間がとれなかったりすることがあれば、やはりタイムリーに今言いたいと言っているときに、受けとめてもらえるという形が一番いいのかなと思います。本来であれば、そういった役目を保護者がするべきだと私は思っています。こちらのいじめ防止に関する意見交換の中にもありましたが、子どもの命を守るのは親であるという意識を皆さんがやはり持ってもらいたい。そこはそこでキープしておいて、もし学校の中で何かあったときに先生にSOSを出して受けとめてもらえる、そしてそこがすぐに受けとめてもらえれば、そこにはすごく信頼関係が生まれてくると思います。やはりその信頼関係を築かないと、子どもからの意見ももらえないと思いますし、子どもとの信頼関係がなければ親からの信頼も得られないと思います。その結果両方よくない関係になってしまうので、そうした部分をつくるためにはやはり先生に時間の余裕が欲しいと思います。

先ほど私が申し上げましたように、お母さんたちと話をすると、実際にそれができるかどうかは別にして、案がきちんと出てきます。そうすることで、皆さんと意見の共有ができる。そして、そういうことがもしその小さな会議の中でもできるのだとすれば、それが例えばPTA会長を集めて区ごとにしてみるとか、そういったことを何か目に見える実動的なもので対応できていけば、もしかしたらどこかに突破口があるのかなと思います。そのため、そうしたところをもう少し保護者などに意見を求めても大丈夫なのではないかと思えます。

教育委員会も手一杯のところがありますので、オープンに先ほど加藤委員がおっしゃったように、やわらかい感じで聞いてみるということも必要なのではないかと今すごく思っています。

○奥山市長 ありがとうございます。

なかなか児童生徒や保護者の方も、先生はいつも忙しそうだから、何か声をかけても申しわけないような、こんな話で先生の時間を使っていいだろうかというためらいが

先に出てしまうというのは大いにあるかもしれませんね。聞いた話ですけれども、PTAの役員の方が引き継ぎの中に、先生の時間をたくさん使ってはいけないので、ご相談事は簡潔にまとめて、先に考えてからポイントだけを短時間でお伝えすることと、何かノートに引き継がれたとかと昔聞いたことがありましたけれども、それだけ気を使っていただいているのかもしれないですね。

今野委員、いかがでしょうか。

○今野委員 住んでいるところの町内でお祭りがあつたり、あるいは豆まきをするというときに、最初はなかなか子どもが集まらないということもあつたんですけれども、小学校の校長先生のご理解をいただけるとたくさん送り込んでいただけたりするものです。多分おみこしと一緒に担いだ仲間というのは、ある意味連帯感ができたりするので、町内のそういう行事に参加するということは、学校だけでない組織の中で縦のつながりも期待できますし、人間というのは何事も一緒にやるということで連帯感が生まれてくると思いますので、ぜひ町内としても学校に少し働きかけて、子どもたちを送り込んでいただけたらありがたいと思ったところです。

また、一番町の近くの話で恐縮ですが、なかなか子どもたちが学校に集まらないということの中で、少し話が違いますが、学区制を柔軟に運用しているところもあるように聞いています。皆さんの話をいろいろ聞いてみると、先生方の人的な投資というのもこれで終わりだということでないような気もしますが、中学校でいじめ対策専任の先生だけで大変な予算と伺っておりますが、これをもう一段進めていくと、またこれも大変な数字になるというのは概算で聞いております。そのたびにどんどん増やしていったいいのだろうかと感じたりもしているのですが、やはり、例えば今までの既成概念をある程度変更して、私はたまたま学区制でないところしか行っておりませんので、1時間かけて通っていた友達もいたわけですが、今私が住んでいるところから通える小学校が3カ所か4カ所ぐらいあるので少しずつ柔軟な学区制の運用をするということも、新たな校舎をつくるとか教室を増やすとかということもいろんな投資が大変だと思いますので、ある程度柔軟に学区制を考えてみることによって、人件費などをどのくらい抑えられるものかということも検討しておく必要があるのではないかと感じています。

○奥山市長 ありがとうございます。

いずれにしても、いろいろなマンパワー、特に教員サイドのマンパワーの充実という

ことになった場合の人員費の問題、全体に対して例えば少人数学級のように教員数を増やしていく問題と、また一方で、先ほどのお話のどこかでも出たようにスクールソーシャルワーカーであるとか特別支援教育の支援員であるとか、また学校事務員であるとか、それぞれの専門領域に対して必要な手当てをしていく分、それぞれに特質があるかと思えます。学区の調整の問題も含めて、どちらにしても限られた財源になりますので、多角的にその辺の特質を考えていくという必要は出てこようかなと思えますね。

一緒に活動することの意義というお話などもありました。まさに学校はそのことを目指しているとは思いますが、吉田委員、いかがでしょうか。

○吉田委員 今人的パワーという話題もありましたので、いわゆる教育現場の環境整備というところで、せっかく話題が広まりつつありますが、少し小さな視点で話をさせていただきたいと思えます。やはり人的パワーですから、予算が伴いますので、かなり難しいところはございますが、事実をここで皆さんに共有していただければなという願いで話をいたします。

資料1の10番に当たるところでございます。いわゆる配慮を要する児童生徒への指導と支援ということでございますが、やはり多くの学校に配慮を要するお子さんはおります。そのことに対しては、教職員はもちろん当然ですが、子どもたちも十分に配慮ある行動・言動をとっています。ところが、長い間、同じ空間におりますと、通常 of 配慮ではカバーし切れないケースも出てくるわけでございます。そうなりますと、以前、校内暴力が多くあった時代には、教員は必ず複数対応しなさいと言われておりました。ですから、こういういわゆる配慮を要するお子さんが通常でなくなった場合の配慮というのが教職員の複数対応というのが必要になり、あわせてもう一つの方法としては、取り出し指導、いわゆる適切な取り出し指導を行うことが、お互いの学びにとっていいことなのかなと思えます。

その取り出し指導に対応できる、また複数に対応できる現体制の適任者といえますと、やはり特別支援コーディネーターが一番ふさわしいと思っておりますが、その現実というのが、特別支援コーディネーターの8割近くが学級担任と聞いております。そのため、自分の授業、学級を置いてその現場に向かうということが非常に困難であるというところに、また一つの問題があると思っているところです。

今回の事務局の国に対する要望書にも専任化がうたわれております。大切なことだと

思います。ただ、今言いましたように費用がかかるものなので、当分の間はなかなか難しい。とすると、例えば授業時数を少なくする方法はないのかとか、いじめ専任教諭との連携はどうなのかとか、そういうところから、事態が起きたときに適切に対応していく体制づくりというものの知恵を出して考えていかなければならないのではないかと、教育現場の環境整備の視点から申し上げました。

○奥山市長 学校現場の具体のお話をお伺いしました。ありがとうございます。

加藤委員からいかがでしょうか。

○加藤委員 よく我々の議論の中に出てくる自己肯定感を育てるという問題と、いじめという問題は、実はつながっていて、それは自分も他者も大事にするということだと思います。その自分も他者も大事にするという行動は、自分が誰かから大切にされて初めて、それをベースに、できるようになる行動だと思います。

ただ、誰かに大切にされるという環境にないお子さん、あるいはそれを感じることでできない状況というのもあります。以前はその誰かというのは親、そして日本文化の中では特に母親というように長いこと言われてきましたけれども、もはやそういう環境にないお子さんたちのことも頭に入れるのであれば、誰か大人がその子どもに関心を持って、その子どもを見てあげること、そして見ていてあげることがとても大事だと思います。誰かがその大人になれるというのは、私たち誰でもがその大人になれるということなのかなと思います、子どもたちが自分を好きになる、そして他者を受けとめることができるようになるための教育に一人一人がささやかながら関わっていくことが大事ではないかと思っています。

○奥山市長 ありがとうございます。

最後になりますが、教育長からは何か。

○大越教育長 先ほどとも重複するかもしれませんが、今、加藤委員がおっしゃったことに同感です。子どもが皆同じようなお子さんの扱いでは済まない時代に入っており、当然教員も子どもの心理、心情を理解して対応していかなければならない。ある意味でスクールカウンセラーやソーシャルワーカーとの役割分担というのは大事ですが、ではそちらが充実すれば丸投げしていいのかということ、そうではないだろうと思います。そういう点で、保護者というのも本来は子どもとの関わりを十分見る立場にありますが、一様ではない保護者もたくさんいらっしゃることも十分踏まえて、今おっしゃったように、保護者とは別の大人がきちんとそこを補完していくような仕組みを考

えていく必要があるだろうと感じています。その中で教職員の増員というのも確かに必要な項目ではあるかと思えます。

ただ、その中で私はやはりそれを実現したから、イコール、いじめ対策になるとは限らないと思えます。それは対策の一つにはなり得るけれども十分ではないと思うのです。そこに、先ほども少し申しましたが、子ども一人一人の対応につながるような、すき間を埋めるような対策、そこを補完して初めて網の目が小さくなるだろうと思えますので、そこを地域の方々のお力をいただいたり、専門職の力をいただき、総力戦にしていくための施策の実現ということを一層考えていく必要があると再認識した次第です。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

今日は限られた時間ではありましたが、この間、大変短期間の中で、教育委員会として取り組んでいただいた14項目の事業についての概要の報告、そしてまた西山中学校の具体的な事例なども含めてお話をいただく中で、委員の皆様からそれぞれの大切な気づきのポイントをお示しいただいたと思えます。

何よりも今、いろいろなご意見を伺う途上ではございますが、先ほどもありましたように、現場のお声、現場での課題の把握がどうなっているかということを中心に丁寧に把握をし、なるべく実感のレベルが抽象化され過ぎないように、そのことに配慮をしながら探っていかなければいけないということや、また、1つでも2つでもこれがよかったというものがあれば、それはリアルタイムになるべく早く発信する。別にそれを全学校でやれということではなくて、多分多くのものがこれはやったらいいのではないかと、もしくはこれがよかったと思うという発信はこれから続くでしょうが、各学校、本当に規模も地域のありようも違うわけですから、そのような中で、地域や学校やPTAで話をさせていただいて、じゃあ我が校はここを中心にやってみようか、じゃあ生徒にも入ってもらおうという学校もあるでしょうし、いやいや、うちは小規模校で生徒と地域は常に話し合っているから別の角度から取り組んでみよう。先ほどお話にあったように、じゃあお祭りのおみこしに今度は少し学校に協力してもらって全員参加でやってみようとか、いろいろなやり方はあるだろうと思えますので、それら具体的に何ができるかということを一歩踏み出していく必要があるだろうということ。

そしてまた、最後の加藤委員のお話によると、まず自助努力で解決していくことが難しい環境にある親御さんや生徒に対して、地域の側からどういうアプローチができる

か、また、行政の側からそこにどういう支援ができるか。それらについてもやはり具体的に踏み込んで議論を深めていく必要があるだろうなと感じたところでありました。大変多岐にわたるご意見を賜りましてありがとうございました。

それでは、今日の総合教育会議はここまでとさせていただきます、このことも含め、今後とも皆様のご意見をいただければと思っているところでございます。本当にいろいろとありがとうございます。

3 その他

○奥山市長 事務局から何か連絡というのはありますでしょうか。

○事務局 それでは、次回の会議でございますが、日程につきましては改めて調整させていただいた上でご連絡をさせていただきたいと存じます。

○奥山市長 では、教育長からどうぞ。

○大越教育長 私のほうから、その他ということで、4月末に起こった事案についての今後の詳細調査の状況でございます。

教育委員会におけるいじめ問題専門委員会の委員の選任というところで、今、鋭意調整を進めているところでございまして、ご存じのように、この間、遺族からの委員の推薦ということでのご希望も踏まえまして、そしてこの委員会は既存の委員会であり、今までの委員でおやめになった委員も何人かいらっしゃいますので、その後任の調整が今まだ完全に終わったわけではありません。今、間もなく調整は最終段階になろうとしているところでございますので、その目途がつき次第、委員会への諮問等、しっかりと進めていきたいと思っております。今日は具体的なスケジュールまで述べることはできませんが、この点については準備をしっかりと進めてまいりたいと存じます。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

市長のもとに立ち上げる考えの委員会も含め、教育委員会の専門委員会も含め、いずれにしても迅速にというご要望の強い委員会でございますので、我々事務局もそれぞれしっかりと連携しながら力を尽くして、早期に前に事態が進むように努めていきたいと思っております。引き続きいろいろなご助言をお願いしたいと思います。

4 閉 会

○奥山市長 それでは、特にこれ以上その他もないようでありますので、以上で本日は閉会とさせていただきますと思います。長時間ありがとうございました。